

コミュニケーションという日本語表現

小林 慎也

1 初めにコミュニケーションがあった

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので言によらずに成ったものは何一つなかった。」

ヨハネによる福音書。有名な冒頭の一節である。

さらに、創世記の天地の創造にはこうある。

「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名になった。」

「万物は言によって成った」「それはすべて、生き物の名になった」という。人が周りにある山や川や鳥や虫たちに気付いて、他と区別して固有の名前をつけてやる。そうすることで存在を認め、意識する。ある

関わりを持つようになる。そんなプロセスだろう。人間にとつての「言葉」の始まり、人間が獲得した最初の言葉をキリスト教はこうした仮説で説くのだが、認識したものに言葉で名を与えるというのは、いまの言葉で言えば、「コミュニケーション」の起源と考えることもできる。ものに名を与えることは、そのものを人が認識することであり、認識という行為は、そのものと「コミュニケーション」を持つことだからである。

ここで、「コミュニケーション」を持つと言えば、おおよその意味は理解できる。日本語としても、通用する。だが、正確にはどんな意味を持っているのか。問い詰めると意外に難しい。

情報化社会と言われる現代、日本でも「コミュニケーション」という言葉がそのまま使われるようになって久しい。あらゆる分野で、この舌を噛みそうなカタカ

ナが使われている。その中で、とくに、コミュニケーション装置によるコミュニケーションの状態が加速し、「出来事としてのコミュニケーション、人と人とのフィジカルな交流の場としてのコミュニケーション、そういう側面が非常に弱い」(粉川哲夫)、「もう少しバランスのとれたコミュニケーションの形を、(略)日常的なコミュニケーションと、マス・コミュニケーション機械の両方を見渡せる場を作りたい」(鶴見俊輔)という声も上がっている。テレビやワープロ、パソコンなど、メディアの具体的なものを指すカタカナ表記の外来語は、言葉が指示する対象に紛らわしさはないが、実体の見えない観念的抽象的な言葉の場合は、しばしばその定義や概念規定があいまいなまま使われる例が多い。「コミュニケーション」という言葉もその一つだろう。平凡社大百科事典によれば「(コミュニケーション)にびったり相当する日本語はなく、使われる文脈に応じて用語が選ばれる」としているが、そうした使い分けが十分にできているのだろうか。

コミュニケーションという言葉は、どんな形で日本に導入されたか。まず「マスコミ(マス・コミュニケーションの略)」という語が先行した。一般には戦後ま

もなくと考えていいだろう。それ以前は、ジャーナリズム(古くは操觚界と言われた)で、「新聞雑誌、ラジオテレビなどにより、時事的な問題の報道、解説、批評などを伝達する活動の総称」として使われたが、テレビの普及に従って、「マス」(大衆、大量)を強調する「マスコミ」にとって代わられた。同時に、広く国民一般を対象とする情報伝達という意味合いと新聞やテレビなどの媒体(メディア)そのものを指すという二面性で語られるようになっていく。ここから、社会学、教育学、心理学などの分野でも「コミュニケーション」が広く使われるようになったが、その概念は、厳密な定義を抜きにして普及し始めたきらいがないわけではない。

では、コミュニケーションという言葉が意味する概念や意味はどんな輪郭でくくられる内容を持っているのか、日本語に置き換えるとしたら、どんな言葉が適当なのかを考えてみたい。

2 言葉の定義

まず、外国ではどのように定義されているのか。とりあえず、英語の辞書によって、見てみよう。一般的には、ほぼ六つに分類される。

一、思想・情報などの伝達・通達、通信。熱・感情などの伝達、病気の伝染。

二、伝達・交換される情報。通信、文通・手紙、伝言。発表論文。

三、言葉・記号・身振りなどによる情報・知識・感情・意思などの交換過程。意思疎通による親密な関係。

四、通信、交通、連絡・通信の方法手段。

五、交通連絡の機関（道路、電信、電話、ラジオ、伝令など）。

六、電子工学などによる通信情報伝達法。非言語的なものを含めた観念、態度、知識の伝達、表現。

このほかに、専門用語として、軍事関係の後方連絡などにも使われる、となっている。（研究社『新英和大辞典』）

ちなみに、語源はどうか。ラテン語では *communis* (*communis to severa*) で「何かと何かとのあいだを何かが移動して両者のあいだに共通な何かを作り上げていく活動、行為」だという。「コモン（共通の）」という言葉通り、二つのものに共通の関係を作り出すことだろうか。一部には、*communication*（コミュニケーション）だともいう。聖体

拝受の意味から、人間と神、または人間の「合体」「結合」を意味する説もある。

試みに、日本語の辞書を引くと、「①社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語、文字、身振りなどを媒介として行われる。②動物どうしの間で行われる身振りや音声による情報伝達。」（大辞泉）となっている。

また、前出の平凡社大百科事典では「情報の移動が送り手から受け手への一方通行の場合は、報告、通報、通信、伝達である。マス・コミュニケーションは大衆伝達、大衆通報で、テレ・コミュニケーションは電気通信である。それに対して、情報が送り手と受け手の間を往復する相互通行の場合は、会話、討論などで、その結果生まれる共通理解、合意、ふれあいなども、コミュニケーションの一つの形と考えられる。ものもの一方通行的移動は交通、輸送、贈与で相互通行では交易、売買、交換などである。」と説明されている。

研究書を見ると、もっと複雑になる。「もっとも広い意味では、『送り手が受け手に対して、なんらかの記号を伝える過程である』というような概念があてはめられる。また、そうした記号がただ伝達されるだけでなく、受け手に対してなんらかの

反応を生じさせるものであるとするならば、カール・ホヴランドのいうように、『一つの個体が他の個体の行動を変更する刺激を伝達する過程である』ともいい得るわけである。(生田正輝『コミュニケーション論』)

「コミュニケーションという言葉は日本では一時、通信とか通報、伝達という言葉に訳され、用いられたことばであるが、定着せず、今日ではカタカナ表記になつてゐる。コミュニケーションを定義しようとするさい、その人の研究領域によつて視点が異なる。例えば心理学者の定義の場合は社会学者の定義よりせまい視点で定義づけが行われていると言えよう。つまり、ホヴランドは、送り手が受け手の行動を『変容』するために言語シンボルなどによつて刺激を伝達する過程をコミュニケーションととらえている。(略)これに対して、社会学者の視点は幅広い。社会全体の展望の中でコミュニケーションを定義づけようとする姿勢が見られる。つまり、シュラムやクラーリールはコミュニケーションを『人間関係』を成立させるものとしてとらえている。ハートレー夫妻はコミュニケーションを基本的『社会過程』(社会関係)として受けとめている。(清水英夫ほか編『マス・コミュニケーション概論』)

また、林進編『コミュニケーション論』によれば、F・E・X・ダンスは一五のタイプに分類しているという。理解。相互行為、関係。不確実性の減少。プロセス。移送、伝達。連絡、結合。共同性。チャンネル。伝送体、回路。記憶、貯蔵。識別反応。刺激。意図。時間、状況。パワー。(マクウェールの要約)

さらには、簡潔に「とりあえずコミュニケーションを『異質な存在の間の相互作用』と規定しておこう」(伊藤守、小林直毅著『情報社会とコミュニケーション』)とする研究者もあり、人によってさまざまである。

以上のように、辞書だけでも、非常に多義的に使用され、日本語では全体をくくる単一の言葉を言い当てるのは難しい。英語をそのまま使うのも止むをえないのかも知れない。

私見を交えて、整理してみると、次のようなことが考えられる。

- 一、多義的な内容を持った言葉で、一つに集約しにくい。
- 二、さまざまな学問分野で使われており、分野ごとに意味が違う。

- 三、一方通行型と相互通行型の二種類がある。
 - 四、物質的なものと観念的なものの二種類がある。
 - 五、——から——へ。二項対立、二元論的な意味をはらんだ表現である。
 - 六、日本語の場合、コミュニケーションと結び付いた言葉で意味を変える。例えば、コミュニケーション行為。コミュニケーション過程。コミュニケーション機能。コミュニケーション作用。コミュニケーション・スキルなど。
 - 七、ものそのものの存在を指すよりも、過程（プロセス）、機能、作用、相互関係などを含む「場」としてとらえられるケースが多い。
 - 八、時間性と空間性を合わせ持つ。
- ここでは、五と七について考えてみたい。「コミュニケーション」は、本来、あるものとのもの、ある人、ある人とのもの、あるいはあるものからあるものへという、つなぐものや伝わるものとの二者を想定する概念である。それでは、その二つの「もの」とは何だろうか。まず、コミュニケーションを意識する主体を中心に考える。かりに、人、私、我、自分である。これは、自分と自分というコミュニケーションから始まる。

見る自分と見られる自分、その間でもコミュニケーションは行われる。

さらに、人、私、自分を核として、周囲とのコミュニケーションが考えられる。周囲の他者、家族や血縁の人、同じ地域に住む人、同じ国、世界の他国の人、さらには、異なる宇宙の異星人も想定しなければならぬかも知れない。人も、特定の個人としての他者だけでなく、集団、マスとして把握する場合もある。

こうした人間との関係だけでなく、周囲の環境、住む、着る、食べるもの、花や木、石や土、空気や風、自然と宇宙などもある。さらには、神という概念と向かい合うこともコミュニケーションの対象として考える必要があるだろう。つまりは、人間の営みのすべて、存在するあらゆるものが「コミュニケーション」の要素となるのである。

強いてあげれば、物質の移動（交通）、英語ではトランスポーターションに関連したものと、思想や感情、意思、知識など、目に見えない「情報（インフォメーション）」の、文字や映像による移動、伝達に大別できる。現在、日本で使われるのは、主に後者の「情報の伝達」を指す場合が多い。「もの」の移動と「こと」の移動と言い換えてもいい。また、伝達、移動という

動的な把握と平行して、情報や通信そのものを指したり、メディアを指したりする場合にも使われるケースが多い。これも、一語で置き換えるのは難しい理由だろう。

一般に、コミュニケーションに関する研究書のほとんどが触れているように、コミュニケーション過程のモデルは以下のようなになる。

つまり、一方にメッセージの送り手があり、発信機があつて記号化したメッセージが送り出され、受信機を経て受け手に届くというモデルである。理論的には、情報伝達はこうした過程で始まり、終わるわけだが、「コミュニケーション」という言葉が厄介なのは、「送り手・メディア・受け手」という行為と機能、過程、それにそこで使われるメディア、さらにそれらが行われる空間、磁場までのすべてを包括する内容を抱え込んでいるからであろう。

3 人間関係

ここでは、動物レベルのコミュニケーションや、対自然のそれを脇において、人間の社会生活に限って、主として「人間対人間の関係」において、整理すると、

以下のようなになる。

- ① 個人内コミュニケーション。自己の相対化。
- ② 対人コミュニケーション 即自と対自となる。
- ③ 集団間コミュニケーション 一人と集団、集団と集団。

④ マス・コミュニケーション 媒体、メディアを使った大量伝達。

また、別の分類もある。

- ① 言語を用いるコミュニケーション。これをさらに、日本語（自国語）を使う場合と、異国語（英語など）を使う場合に分けることもできる。言語を広く文化として、異文化コミュニケーションとするのも含める。

② 言語以外の手段を使ったノン・バーバル・コミュニケーション 身振り手振りなどを使うケース。

動物のコミュニケーションはここに入る。

あるいは、

- ① 対面して行う近距離のコミュニケーション。
- ② そうではない電話、通信、活字などのメディアによる遠距離コミュニケーションに分類する場合もある。

さらに、一方向（ワン・ウェイ）と双方向（ツー・

ウエイ)という分類も可能である。こうした人間間コミュニケーションを基本的社会過程としてとらえた古典的な定義はC・H・クリーの「コミュニケーション」とは、それによって人間関係が成立し、発展するメカニズムを意味する。それは、精神のすべてのシンボルであるとともに、空間を通してそれを伝達し、また時間においてそれを保存する手段でもある」というものである。ここでは、人間の社会的な行為、行動、営みのすべてが包含されている。

この定義は、言葉による表現とも類似している。

言語学の分野では、始め言葉の一つの道具(もの)としてとらえ、頭の中に道具があつて、これを使って考え、思想を伝達するとした。この道具は、概念と聴覚映像とがかたく結びついて構成された精神的な実体と説明され、「言語」または「言語の材料」と呼ばれたが、昭和に入つて、時枝誠記がこれをしりぞけ、言語過程説を提示した。対象―認識―表現という過程的な構造が言語の本質だとしたのである。この説には、賛否両論があるとされるが、「過程」という観念を導入したことは、「コミュニケーション」の持つダイナミズムとも共通する視点であろう。

こうした幅広い内容を持つ表現を単一の語で表すの

は至難の技である。コミュニケーションという外来語に任せる方が賢いのかも知れない。

4 日本語による表現

コミュニケーションという言葉の意味する概念を日本語で語ろうとすると、どうしても、観念的な抽象語に頼らざるをえない。これ以外に適切な言葉はないのか。もつとかみ砕いて表現するとどうなのか。

日本語では、多く、名詞はものそのものを指し、行為や動作、過程には動詞が使われる。情報の伝達は、動詞では「伝える」だが、これは一方通行の言葉である。双方方向のベクトルで考えると、かわる、つながる、結び付く、といった言葉が思い浮かぶ。名詞に置き換えてももうひとつびたりしない。動詞を単純に名詞化しただけという感じがあるからか。

鶴見俊輔・粉川哲夫編『コミュニケーション事典』では、動詞による項目ネットワークとして、三十二のキーワードを選んでいる。中心になるのは「あつまる」「あつめる」「あやつる」「あらしう」「さらけだす」などで、それぞれ、例えば「あつまる」は「あう」「よぶ」「うたう」「わらう」「おどる」などと相互関係を表すコミュニケーションの具体的な表現とする。名詞

による分類では、挨拶、家、市、歌、宴会、贈り物、共同体、集団など、コミュニケーションの態様と場面約五十カ目が並ぶ。どれもコミュニケーションの属性を言い当てているが、その本質を、その観念を表すには、具体的に過ぎる。

橋元良明編著の『コミュニケーション学への招待』の中で、「日本的なコミュニケーション」にふれて、特徴的なキーワードをあげている。「恥」と「罪」、「タテとヨコ」、「甘え」、「遠慮」と「察し」、日本独特の敬語などをあげ、「言外の表現にコミュニケーション」内容を忍び込ませる日本的なコミュニケーションを高コンテキスト文化としているが、こうした、日本的なキーワードを探せば、縁(えん)、または、えにし」という仏教からきた言葉も考えられる。

①結果を生じる直接的な原因に対して間接的な原因②そのようになるめぐりあわせ。③関係を作るきっかけ。④血縁的、家族的なつながり。⑤人と人とのかわりあい。関係。などの意味を持つ。コミュニケーションとほぼ同じ意味を表している。「縁」と似た比喻では、絆(きずな)、鎖(くさり)なども考えられる。縁もゆかりもない、縁は異なるもの味なもの、といったことわざや格言も多い。

あるいは、やまと言葉では、「間(ま)」もある。

①物が並んでいるとき空間。あいだ。すきま。②家のひと区切りをなしている部屋。③畳の大きさを表す名称。④連続している事と事のあいだの時間。ひま。いとま。⑤話の中に適当にとる無言の時間。⑥邦楽・舞踊・演劇などで拍と拍、動作と動作、せりふとせりふなどのあいだの時間的な間隔。転じて、リズムやテンポの意に用いる。⑦ちょうどいい折り、しおどき、機会。⑧その場のようす、ぐあい。などなど。

幅広く用いられるが、二つ以上のものの中間的な時間空間を指す。「場(ば)」や「面」と言い換えてもよい。この「マ」は、今(いま)、山(やま)、浜(はま)などの「ま」に通じる。『間』の『日本文化』の著者剣持武彦氏によれば、「ヨーロッパ人が『時間』という観念と『空間』という観念に分析してものを考えるのにたいして、『間』の観念は、時間をも空間をも示している、ヨーロッパ的に二つの観念に分かちがたいということなのである。なぜこのような独特の観念を構造として内包している固有の言語を保持しているかを考えるには、この言語を形成させた民族の歴史と風土の問題にまでさかのぼらざるをえない。」という極めて日本的な言葉である。「コミュニケーション」とい

うヨーロッパ的な概念の言葉が容易に日本語に翻訳しにくいのも同じことかもしれない。

ただ、縁や間、場、面などには、コミュニケーションが機能する空間性は把握できるが、もう一つの移動性やダイナミズムは盛り込めないのが難である。

さらに、ものどもの、人と人との出会いとする考え方もあるだろう。

辞書や定義などにも散見される、もう一つ有力なキーワードに、「関係」という言葉がある。「人間関係」と言い換えてもよい。加藤秀俊著『人間関係―理解と誤解』（中公新書）はその点で示唆に富んでいる。

「わたし自身の専門の領域は、人間コミュニケーションの研究である。(略) コミュニケーション科学の主題は、結局のところ、人間同士の関係のメカニズムの問題であり、それをすこしでもあきらかにすることは、われわれ人間の生活にとってプラスになるにちがいない。(略) 過去五年ほどのあいだにシリーズとして書いたコミュニケーション理論への覚書をこの本の下敷きにして使ってみた。」(まえがき)

関係という言葉は、かかわり、あるいは付き合いと言い換えが可能だが、「どんなふうにして、ひとりの人間が他の人間と深い『つきあい』をむすび、お互い

の人生を刺激しあう存在になることができるのか。そのためには、そもそも人間同士のあいだではたらいっているコミュニケーションのメカニズムを考えてみる必要がありそうだ」(第二章)

メカニズムは仕組み、装置などがあたるだろう。ここでは、人間関係を付き合いとコミュニケーションの二つの語で語っている。

ここから見ても、「人間関係」という語はほとんど「コミュニケーション」と重ねて用いられている。人間関係、社会関係は、M・ブーパーによれば、「我・汝」関係だという。これは、「自立的存在である他者との相互的關係性」(伊藤守)とも言い換えられる。我と汝の「対話的關係性」をコミュニケーション的な次元で回復させることが課題とされている。それは、岩波講座「現代社会学」の三巻で「他者・関係・コミュニケーション」の題でまとめられているのにも共通する視点だろう。今後のコミュニケーション論は、おそらく「関係」を軸に展開されるのではないか。とすれば、このカタカナ表記の言葉も「関係」を中心に日本語へ置き換えることも検討されてよい。

5 今後の課題

こうして、見て行くと、コミュニケーションはほとんど人間に関するあらゆる分野を包括する営みである。「二人以上の人間のあいだでの言葉や身振りによる意志や思想や感情の交換、交流―すなわちコミュニケーション―という人間の活動は、二五〇万年か三〇〇万年前と推定される人間の誕生のときに、すでにはじまっていたはずである。そして今や二一世紀が迫ってきた二〇世紀末に至るまで、コミュニケーションは途絶えることなくつづいている。それは、近代や現代の所産ではけっしてない。」(稲葉三千男『コミュニケーションの総合理論』)

しかし、実際に、このコミュニケーションへの関心が始まったのは二〇世紀の初頭からというものも事実である。なぜなのか。この研究へのアプローチを学問分野で見ると、ここでも多くの学問がかかわっていることに気付く。例えば、物質の移動という側面から交通経済学が取り組み、その現象として社会学の範疇にも含まれる。数量化される場合は、数学がモデルを提供する。人間そのもの、人間と人間の間を考えるのは、古くから哲学や論理学、あるいは心理学、教育学が受け持ってきた。人間だけでなく、生物の個体間の相互

交流については、動物学や生態学、文化人類学などがミツバチ、サル、アリ、イルカ、コウモリなどを使って研究しているのは周知の事実である。また、コミュニケーションの最も主要な武器である言葉については、言語学、音声学、記号論、修辞学などを網羅している。その他の学問でもかかわりも持たないものはないといってもいいほど、多領域にまたがっている。

ということ、これまでの学問の枠組み、つまり存在論的な分類を、「コミュニケーション」というキーワードで組み替える視点での新しい発想の学問領域と考えてもいいかも知れない。学際的などというより、新しい学問のパラダイムとして「コミュニケーション学」が登場してきたのである。

比喩的に言えば、これまでの学問の分類は、垂直軸で進められて来た。大きな枠組みから、細分化し、ピラミッド形式で裾野を広げてきた。研究の範囲を限定し、その中で深化させてきた。しかし、「コミュニケーション」は、垂直から水平に軸を代えて、学問相互の関係から見直しを図る学問ということもできよう。

従来の学問領域にこだわらない新たな枠組みを「コミュニケーション」という表現がうながしているようである。

以上、コミュニケーションとカタカナ表記される表現について、主として日本語表現の立場から考察した。カタカナ言葉の氾濫は国際化の時代に止むをえないとしても、それを自明のこととせず、日本語の側からも正確な概念把握を極めてみる必要があると思われる。

参考文献

- 稲葉三千男『コミュニケーションの総合理論』（創風社）
同『コミュニケーション発達史』（創風社）
清水英夫ほか共著『マス・コミュニケーション概論』（学陽書房）
林伸郎ほか共著『マス・コミュニケーション概論』（学陽書房）
大澤真幸ほか著『他者・関係・コミュニケーション』（岩波書店、現代社会学講座3）
鶴見俊輔、粉川哲夫編集『コミュニケーション事典』（平凡社）
三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫）
加藤秀俊『人間関係―理解と誤解』（中央公論社新書）
剣持武彦『「間」の日本文化』（講談社現代新書）
原岡一馬編『人間とコミュニケーション』（ナカニシヤ出版）
橋元良明編著『コミュニケーション学への招待』（大修館

書店）

林進編『コミュニケーション論』（有斐閣）

生田正輝『コミュニケーション論』（慶応通信）

伊藤守・小林直毅『情報社会とコミュニケーション』（福

村出版）

辞書、辞典、事典は省略。

文中、敬称略。